

令和 3 年 4 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12246

研究課題名(和文) 地域社会で生活するがんサバイバーの生き抜く力を育む対話型支援モデルの構築

研究課題名(英文) Development of an interactive support model to foster the wisdom of surviving with cancer as perceived by participants living in the community

研究代表者

田村 恵子 (Tamura, Keiko)

京都大学・医学研究科・教授

研究者番号：30730197

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：地域社会で生活するがんサバイバーの生き抜く力を育む対話型支援モデルの構築するため、Safe Community of Inquiryを基盤とした哲学対話プログラム開発および、がんサバイバーの生き抜く力を育むためのスピリチュアルケアプログラムの開発を実施した。具体的には、哲学対話プログラムを運営する援助者を対象に対話的態度を身に付ける教育プログラム開発のための予備調査、がんサバイバーが認識する生きる知恵を明らかにするインタビュー調査を実施した。また生きる意味や目的の探究を促すスピリチュアルペインアセスメントツールを用いて、適切なスピリチュアルケアを提供するために非ランダム化比較試験を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した教育プログラムを受けた援助者が対話型支援活動の運営を行っている。この支援活動においてがんサバイバーが認識した生きる知恵は、動的で複合的な構造をもつことが明らかとなった。それは、対話型支援の場における関係性や時間性との相互作用を通して、自分の中にあったつらいことも含めた経験を、自分の物語の中で意味づけることで輪郭が与えられ、「今の自分でいいんだ」と思えるようになることであった。このことから、がんサバイバーの生きる知恵を育むためには、対話型支援が有用であり、今回の結果を更に発展させモデルを構築することは、地域社会で生活するがんサバイバーが生き抜くための支援への寄与となる。

研究成果の概要(英文)：In order to build a dialogue-based support model to foster the wisdom of surviving with cancer as perceived by participants living in the community, we developed a philosophical dialogue program based on Safe Community of Inquiry (SCoI) and a spiritual care program to foster the wisdom of surviving with cancer as perceived by participants living in the community. Specifically, we conducted a preliminary survey for the development of a program for program management assistants to develop an interactive attitude, an interview survey to identify cancer survivors' perceived wisdom for living, and a non-randomized controlled trial using a spiritual pain assessment tool.

研究分野：がん看護学

キーワード：スピリチュアルケア がんサバイバー SCoI 生きる知恵

1. 研究開始当初の背景

日本では、超高齢社会を背景にがん罹患者数は増加の一途を辿るとともに、治療技術の進歩によって5年相対生存率は増加していることから、がん対策基本法第2期推進基本計画では「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」が目標とされている。しかし、地域で生活するがんサバイバーへの具体的な支援は示されておらず、がんサバイバーの増加が予測される地域社会で、がんと診断された時から人生の終焉まで生き抜くための支援体制づくりが急務であるといえる。

米国ではがん体験者自らが主体となり活動してきた歴史がある。がんと共に主体的に生きる人をがんサバイバーとして捉え、診断から死に至るまでのがんサバイバーのセルフアドボカシーを高めるツールが開発されており(Walsh et al. Cancer Pract.1999)、地域社会で生きるがんサバイバーを支援する取り組みへと発展している(Miller.K,医学書院,2012)。

英国では、地域社会におけるがん医療は主に終末期ケアとして発展してきたが、1996年「がんを患った人々が出会い、体験を分かち合う居心地の良い、打ち解けた非医療的な環境の創造」を目的として、Maggie's Cancer Caring Center が開設されている。本センターは英国外にも開設され、がんサバイバーには専門家から質の高い実践的なアドバイスや精神的支援、他のがん患者と出会える場所が提供されている(Heathcote, BMJ.2006;Lee, EJPC.2010)。

がん診療連携拠点病院にがん相談支援センターが設置され、がんサバイバーの身体及び心理社会的課題に対する相談支援が行われているが、相談の大半が連携調整であり、個々への対応が困難であると報告されている(藤原ら, 木村看護教育振興財団看護研究集.2010)。一方、がんサバイバーは、医療者に気持ちに寄り添ってほしいや生きる希望を支えてほしい等を要望しているが(山田ら, Palliative Care Res.2012)、これらの対応には至っていない。これらの対応は、欧米の状況から、従来型の相談支援では十分ではなく新たな取り組みが必要である。

昨今、医療現場ではオープンダイアログなど「対話」の治療的、ケアの側面が注目を集めている。対話は参加者が対等な立場で人が生きる意味や目的、どう生きるかというような生についての根本的な「問い」について考えることが可能であり、特に立場を超えて対等に考えることが可能である方法として Safe Community of Inquiry (SCoI) が報告されている(高橋,死の臨床.2016)。日本においても地域社会で生活するがんサバイバーが自らのセルフアドボカシーを高め、主体的に生きていく力を獲得することはより一層必要であり、SCoI は新たな価値観の問い直しの必要に迫られるがんサバイバーにとり有用である。

このため、地域社会で生活するがんサバイバーに焦点をあて、SCoI を基盤とした哲学対話を用いて生きる力を自ら育むことや、生きる意味や目的を包含するスピリチュアルペインについて自ら探求する姿勢を育むことは重要である。

国内では、医療機関を中心としたがんサバイバーのケアに関する研究は実施されつつあるが、地域社会に密着したがんサバイバーの支援について取り組む施設は少数であり、取り組みは未だ始まったばかりで研究報告も見当たらない。

応募者は、長年がん看護専門看護師としてホスピス、がん相談支援センター管理者、緩和ケア・老年看護学の教授として、がん集学的治療後どのように生きるかという問いに直面するがんサバイバーへの看護を実践してきた。しかし、医療施設内のみでは、地域社会で生活するがんサバイバーに継続的な支援を提供することは、施設職員としての職務、環境面から困難であり、2015年がん体験者・家族の支援団体「ともいき京都」を設立し、地域コミュニティスペース(風伝館:

<http://fudengan.jp>)にて月2回のケアプログラムを開催している。応募者の所属する京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻では、本研究の基礎資料を得るために、2016年がんサバイバーの生き抜く力を支えるケアについて熟練ケア提供者を対象に質的研究を実施した。熟練ケア提供者には、がんサバイバー、医療者であるがんサバイバー、医療者が含まれ、各立場での語りから提供している支援を抽出した。また応募者は、長期に渡ってスピリチュアルケアに関わる研究に携わっており、看護師に対する専門的緩和ケアにおける教育にSCoIに基づく哲学対話の手法を取り入れてきた。本研究では、がんサバイバーが地域社会でどう生きるかという問いを探究する手法としてSCoIを取り入れ、がんサバイバーとその援助者との共同体で探究を深める。

2. 研究の目的

長期に渡りがんと共に生活するがんサバイバーの地域社会で生き抜く力を育む対話型支援モデルを構築するために以下を明らかにする。

1) がんサバイバーの生き抜く力を育むためのプログラムの開発

がんサバイバーの生き抜く力の要素を明確化し、多領域の専門家とSCoIを基盤とした哲学対話プログラムを開発する。哲学対話プログラム運営の援助者となる「ともいき京都」の医療者、がんサバイバーや市民ボランティア等に対して援助者養成プログラムを開発・実施する。その上で、哲学対話プログラムを「ともいき京都」に参加するがんサバイバーに実施する。

がんサバイバーの生き抜く力を育むためのスピリチュアルケアの多施設共同無作為化比較試験(RCT)のプロトコールを作成し実施する。

2) の実施前後の質問紙及びインタビュー調査の結果から、がんサバイバーの生き抜く力の獲得、スピリチュアリティの回復、QOLへのプログラムの効果を検証する。

3) 2)の結果から、多領域の専門家と地域社会で生活するがんサバイバーの生き抜く力を育む対話型支援モデルを構築する。

3. 研究の方法

1) がんサバイバーの生き抜く力を育むためのプログラムの開発

-a) がん体験者のための対話型支援活動の参加者が語る生きる知恵

(1) 目的: がん体験者のための対話型支援活動の参加者が認識する生きる知恵を明らかにする

(2) 対象: 「ともいき京都」の参加者である15名のがん体験者(男性4名、女性11名)

(3) 調査方法: 1対1のインタビューガイドを用いた半構造化面接にて「新たに得た知識、物事に対する対処や向き合い方の変化、ものの見方や考え方の変化」について調査した。

(4) 分析方法: インタビュー調査で得たデータは質的帰納的に内容分析を用いて分析を行った。

-b) 地域社会で生きるがんサバイバーの支援に関する調査

(1) 目的: 地域社会で暮らすがんサバイバーを支援するスタッフのための対話学習プログラムの効果を検討する

(2) 対象: 「ともいき京都」のスタッフ13名

(3) 調査方法: 午前に講義、午後に対話体験の2部構成とした1日開催のプログラムを展開した。主評価として対話評価項目のプログラム前後比較、副次評価として批判的思考態度尺度のプログラム前後比較、評価を補足することを目的とし、プログラム後に講義内容の理解度、対話体験の自己評価、対話体験の自己評価の選定理由から得られた質的データ、支援に対する認識の4つを設定し、質問紙による調査を行った。

(4) 分析方法：

) 対話評価項目、批判的思考態度尺度

SPSS 22.0 for Windows®を使用し、頻度集計適用し基礎的情報を収集すると共に、Wilcoxon の符号付き順位検定を適用し、プログラム受講前後の変化について比較、検証した。

) 講義内容の理解度、対話体験の自己評価、支援に対する認識

SPSS 22.0 for Windows®を使用し、5段階評定の回答について度数分布による分析を行った。

) 自己評価の自由記述から抽出された対話体験の特徴の分析

プログラムで行った対話体験が、SCoI に基づく対話の体験となっていたかを評価するために、自由記述内容から対話の「体験」を示す文脈を取りだし、類似性により抽象化し、カテゴリー・サブカテゴリーを抽出した。その後、抽出した対話体験の特徴と SCoI の主要概念との関連について検討した。

) 支援に対する認識の各質問項目の自由記述内容による選定理由と今後の課題、プログラムの感想についての回答をまとめた。

がんサバイバーの生き抜く力を育むスピリチュアルケアプログラムの開発・実施

(1) 目的：地域社会で暮らすがんサバイバーを対象に Spiritual Pain Assessment Sheet (SpiPas) を用いたスピリチュアルケアを実施し、通常ケアとの比較によって患者のスピリチュアルな安寧、QOL の維持・改善効果を検証する。

(2) 対象：260 名。根治不能の進行がんの成人(20 歳以上)であり、インタビューと質問紙調査に耐えうる体力、現在気持ちのつらさがある者である。また、認知症、せん妄など重篤な認知障害がない状態である。

(3) 調査方法：ホスピス・緩和ケア病棟 5 施設にて、通常ケア(対照群)と SpiPas を用いたスピリチュアルケア(介入群)とを時期を分けて(対照群を先に)登録して各群のケアを提供し、自記式質問紙にて 2 週間後のケアを評価した。

(4) 分析方法：主要評価項目は、FACIT- Sp (Functional Assessment of Cancer Therapy-Spirituality Well-being) であり、各群のベースラインから 2 週間後の合計点数の差を比較する。副次的評価項目は、Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS)、Comprehensive Quality of Life Outcome inventory (CoQoLo)、日本語版 M. D. アンダーソンがんセンター版症状評価票 (MDASI-J) である。

4. 研究成果

-a) 生きる知恵として 26 個のコアカテゴリーが抽出され、そのうち、参加者の思いや行動に関するものが 20 個、対話型支援に関するものが 6 個であった。参加者の思いや行動に関するコアカテゴリー(前者の 20 個のコアカテゴリー)には【理不尽な現実には納得できず抗う】【自分だけが辛いのではないと思える】【社会との疎外感から自己価値を失う】【がん体験者である自己を肯定できる】が含まれていた。また、支援に関するコアカテゴリー(後者の 6 個のコアカテゴリー)には<体験者同士の対話と繋がり><心地よく受け止められる><自由に思いを語れる>が含まれていた。

考察として、参加者が認識する生きる知恵は、参加者が対話型支援の場における関係性や時間性との相互作用を通して、自分の中にあつた辛いことも含めた様々な経験を自分の物語の中で意味づけることによって経験に輪郭が与えられ、「今の自分でいいんだ」と思えるようになるという動的で複合的な構造をもつ可能性が示唆された。

-b)今回はパイロットスタディとして学習効果を検討した。プログラムの特徴は、SCoIに基づく対話を体験し、対話的態度を身につけることを試みた点である。結果、量的評価による有意差は認めなかったが、講義内容の理解度、対象者の対話体験の特徴、感想等から本プログラムの実施可能性が示唆された。

2020年12月対照群のデータ収集の完了し、介入群のデータ収集が目標数に満たない状況である。昨年よりCOVID-19感染症予防対策のため実施施設での対象者登録が困難な時期があったため、研究期間を延長して継続している。

今回、COVID-19感染の影響により「ともいき京都」の対面での活動が困難となり、活動内での効果検証を実施することが出来ず、期間内に成果としてがんサバイバーの生き抜く力を育む対話型支援モデル構築まで至ることはできなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ichiara K, Ouchi S, Okayama S, Kinoshita F, Miyashita M, Morita T, Tamura K	4. 巻 17
2. 論文標題 Effectiveness of spiritual care using spiritual pain assessment sheet for advanced cancer patients: A pilot non-randomized controlled trial	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Palliative and Supportive Care	6. 最初と最後の頁 46 - 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1478951518000901	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田村恵子
2. 発表標題 スピリチュアルペイン アセスメント
3. 学会等名 日本死の臨床研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田村恵子
2. 発表標題 がん診断時からのサバイバーシップ支援
3. 学会等名 日本癌治療学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ichiara.K
2. 発表標題 Effectiveness of spiritual care using spiritual pain assessment sheet for advanced cancer patients: A pilot non-randomized controlled trial
3. 学会等名 16th World Congress of the European Association for Palliative Care（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 近藤めぐみ、田村恵子
2. 発表標題 What is “the strength of cancer survivors to get through life”? Based on the narratives of the experienced care givers for cancer survivors.
3. 学会等名 The European Association for Palliative Care (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tomoko Sugita; Saori Yoshioka; Misaki Sakai; Keiko Tamura; Naoki Homma
2. 発表標題 Efficacy of the experience-based philosophical dialogue education program for staff to support cancer survivors
3. 学会等名 International Conference on Cancer Nursing (ICCN) 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 市原香織
2. 発表標題 医療者が携わる「第三の場」におけるがん患者・家族ケアの可能性 がんと生きる知恵を育み支え合うコミュニティ：ともいき京都
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 市原香織, 大内沙也子, 岡山幸子, 木下富貴子, 宮下光令, 森田達也, 田村恵子
2. 発表標題 進行がん患者に対するスピリチュアルケアの有効性：非ランダム化比較試験
3. 学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 市原香織、近藤めぐみ、田村恵子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青海社	5. 総ページ数 395
3. 書名 緩和ケア・がん看護 臨床評価ツール大全	

1. 著者名 田村恵子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 308
3. 書名 緩和ケア 第3班	

1. 著者名 田村恵子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青海社	5. 総ページ数 148
3. 書名 ホスピス緩和ケア白書2019	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>JSPS科研費/地域社会で生活するがんサバイバーの生き抜く力を育む対話型支援モデルの構築・公開シンポジウム～社会の一員として生きる、がん体験者の語り～</p> <p>開催日：2020年11月23日（月）</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西山 知佳 (Nishiyama Chika) (40584842)	京都大学・医学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	吉岡 さおり (Yoshioka Saori) (60454881)	京都府立医科大学・医学部・准教授 (24303)	
研究分担者	星野 明子 (Hoshino Akiko) (70282209)	京都府立医科大学・医学部・教授 (24303)	
研究分担者	森田 達也 (Morita Tatuya) (70513000)	聖隷クリストファー大学・看護学研究科・臨床教授 (33804)	
研究分担者	清原 康介 (Kiyohara Kosuke) (80581834)	大妻女子大学・家政学部・講師 (32604)	
研究分担者	本間 なほ(ほんまなほ) (Honma Naho) (90303990)	大阪大学・COデザインセンター・教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------